国営土地改良事業　事後評価

現地調査概要

北海道開発局農業水産部

地区別現地調査概要　目　次

（国営かんがい排水事業）

上音更（かみおとふけ）地区 …… 1

雄武中央（おうむちゅうおう）地区 …… 3

（国営農地再編整備事業）

由仁（ゆに）地区 …… 5

（国営総合農地防災事業）

富士見（ふじみ）地区 …… 7

令和元年度 事後評価「上音更地区」国営事業評価技術検討会
現地調査概要

日 時：令和元年５月 21 日（火） 12：50～14：00
出席者：
（技術検討会）　長澤委員長、岡村委員、紺野委員、中原委員、波多野委員、森委員
（地元関係団体等）農業者、士幌町、上士幌町、士幌町農業協同組合、
上士幌町農業協同組合
（事務局）　北海道開発局
概 要：
【現 地】排水路

【意見交換会】
委員から、事業に対する効果、要望、期待等に関する質問があり、参加団体から以下の回答や意見、状況説明等や委員から評価に関する意見があった。

・事業実施前は湛水被害があったが、事業による排水改良によって事業実施後は解消された。平成 28 年の台風に伴う大雨時には近傍各地で湛水被害が生じたが、本地区では被害がなかった。

・事業実施中の同時期に、区画整理等を行う道営事業も行われていた。そこでは、国、道、町の関係機関が連携し、調整を図りながらそれぞれの事業を進めてくれた。

・本地区のコントラクター組織については、事業の実施後、大型機械を導入した活用が飼料作物と畑作物全般で進んでいる。一方で、コントラクター組織の作業員確保に苦慮している。

・本地区のクリーン農業の取り組みとしては、周辺地域に比べて畜産農家が多く、堆肥を入手しやすい環境であること、事業実施後は排水改良によって大型機械が入れるようになり、堆肥等を散布しやすくなった。このことにより、化学肥料の使用量が低減している。

・十勝管内では、農協連が各農家の持ち寄った土壌を分析して施肥設計を行う仕組みが構築されており、化学肥料の使用量やコストの低減につながっている。

・事業の実施によって地域の環境に対する意識が変わり、クリーン農業のような環境保全型農業が進められていることが本地区の特徴となっている。そうした効果を定量的に把握するため、事業実施前後に水質のモニタリングを行ってはどうか。

・本地区の輪作体系については、地区内の畑作農家と酪農・畜産農家がそれぞれの農地を貸し合う交換耕作が行われている。

・事業実施後の排水路は、周囲の景観と調和している印象である。

・事業実施前の魚類の生息環境は、段落型落差工により分断されていたため、魚類は生息していない印象だった。事業の実施により緩傾斜型落差工に改良され、今では釣り人やサギ類の姿を見かけるようになった。

・本地区の農家は、周辺地域の中でも総じて経営が安定しており、後継者が育っている農家が多い。新規就農した息子の育て方について、自分自身、親の背中を見て農業の考え方を深めてきたため、息子にも同じように自ら判断させるようにしている。

・バイオガスプラントに家畜排せつ物を搬入した農家は、消化液を利用している。家畜排せつ物はバイオガスプラントの会社が引き取りに来て、消化液はコントラクター事業で散布する仕組みとなっている。

以上

令和元年度 事後評価「雄武中央地区」国営事業評価技術検討会
現地調査概要

日 時：令和元年６月 18 日（火） 13：00～14：15
出席者：
（技術検討会）　　長澤委員長、岡村委員、紺野委員、中原委員、波多野委員、森委員
（地元関係団体等）農業者、雄武町、北オホーツク農業協同組合
（事務局）　　北海道開発局
概 要：
【現 地】貯水池、末端かんがい施設

【意見交換会】
　委員から、事業に対する効果、要望、期待等に関する質問があり、参加団体から以下の回答や意見、状況説明等や委員から評価に関する意見があった。

・事業実施前は、地域全体が大干ばつとなり、牧草が収穫できず、地域総出で天北地域まで牧草を買いに行ったことがある。

・事業実施後は、肥培かんがいを行うことで分げつが多い密集した草地に変わり、今では少し乾燥した状態でも収量があまり変わらず、資源循環がよくなっている。

・近年は、事業が始まった頃に比べて、特に夏場に家畜排せつ物が硬くなる傾向がある。このため、家畜排せつ物に加水しないとポンプでスラリーストアに搬送できない状況となっている。

・事業実施後は、家畜排せつ物にかんがい用水を加水して曝気した質の高いスラリーを散布できるようになった。

・牧草は、水分が少ないと短期間で花を咲かそうとするが、肥培かんがいを行うことによって質の高い牧草を収穫できるようになった。牛乳もおいしくなり、生乳を加工してチーズもできるようになった。これからも新しいチーズを開発したい。

・牧草は、伸びすぎるとトラクターに踏圧されて収量が少なくなる場合があり、かんがいのタイミングが重要となる。事業実施後は、適期に肥培かんがいができ、労働力の軽減につながっている。

・干ばつが続くと、降雨があっても土壌の表面を水が走るため、作土層の水分が不足しがちになる。しかし、経営面積が大きいため、干ばつ時は、被害が目立つところだけにタンカー２台で湿潤かんがいをしている状況である。

・湿潤及び肥培かんがいの必要性は理解しているが、経営面積を300haに拡大したばかりで、ほ場と給水栓までの距離も長く、ほ場全てに撒くことは難しい。給水栓がもっと設置されるとよい。

・関連事業については、現在、町が主体となって多孔管を導入するモデルほ場事業を行っており、予算の範囲内で計画的に進めているところである。

・畑かん技術の普及に向けた取り組みとしては、農協組合員に対する営農指導の一環として、適期の収穫時期や干ばつが続いた際のかんがいの必要をＦＡＸで周知する活動を行っている。

・飼料自給を高めるため取り入れたデントコーンに関しては、大型機械で心土破砕を行うとしっかり根を張るため、湿潤かんがいを行うほどではないと考えている。

・事業実施前は、散布前の堆肥を河川に流入するおそれのない離れたほ場に置いていた。その頃も、地域の河川水質に関して、漁協からクレームを受けたことはなかった。

・雄武町にとって、酪農家の減少は地域の深刻な問題である。新規就農者にとって魅力ある産業とするため、酪農の収益性を強化することがなにより重要である。農業基盤整備はもとより、労働力軽減や担い手の育成・確保のための施策を進めている。

・本事業の実施を含め、町や農協が安心して酪農できる環境を整えていることが、後継者の確保につながっている。

以上

令和元年度 事後評価「由仁地区」国営事業評価技術検討会
現地調査概要

日 時：令和元年６月 11 日（火） 13：05～14：35
出席者：
（技術検討会）　　長澤委員長、岡村委員、紺野委員、中原委員、波多野委員、森委員
（地元関係団体等）農業者、由仁町、そらち南農業協同組合、由仁土地改良区
（事務局）　　北海道開発局
概 要：
【現 地】米穀乾燥調製貯蔵施設、地区内整備ほ場、整備道路

【意見交換会】
　委員から、事業に対する効果、要望、期待等に関する質問があり、参加団体から以下の回答や意見、状況説明等や委員から評価に関する意見があった。

・本地区のほ場区画は、事業実施前は２～３反のほ場が多かった。本事業の実施により、事業実施後のほ場枚数は事業実施前に比べて１／３ほどに減った。

・事業実施後は、区画整理により作業効率が上がり、大型機械の能力を発揮できるようになった。

・事業の実施により、農道上で農業機械を旋回させる「ターン農道」が整備され、ほ場管理作業の効率が上がった。

・水管理について、事業実施前は田越しかんがいをしていたが、事業実施後は１枚のほ場ごとに給水できるようになった。給水作業も給水バルブを回すだけとなった。

・事業実施後は、排水改良が図られ、水田で麦、大豆、野菜類やハウス利用の栽培ができるようになった。地域では個人経営が多く、所得確保のため需要が減少傾向にある水稲の作付けが減り、麦、大豆のほか高収益作物の作付けが増加している。

・事業実施後は、地区内のほ場条件がよくなったことにより、周辺の農家にほ場作業を委託しやすくなった。今は、花き栽培に集中できるようになり、品質重視の栽培方法に変えて所得が上がるなど、経営の安定につながっている。

・地域の土壌は、有機物含量が少なく、タンパク値基準を満たす「ゆめぴりか」が収穫できる。加えて農家の努力もあり、全道でも「ゆめぴりか」の作付割当が多い地域となっている。加工用米についても、今後とも取り組んでいく。

・地区内には、夕張川の旧氾濫原があることから、事業実施前はほ場毎に土質、土壌条件が違っていたが、事業実施後はほ場条件が均一になった。このため、農家によって収量にバラツキが多かったが、地域全体で均一化してきているように感じる。

・地域のスマート農業の推進状況については、基地局が設置されたことから自動操舵装置を取り入れた農家が増えてきている。これからは、本地区のような整備済みのほ場では導入が増える方向に進んでいく。

・防風林として植栽されたミズナラは、順調に活着・生育している。しかし、将来は樹高が30m程度まで成長するため、期待される風害防止の効果だけでなく、営農や通作上の支障、農村景観の保全の観点も考慮して、適切に維持管理していく必要がある。

・地域のクリーン農業の取り組み状況は、事業実施前から毎年、土壌診断、施肥設計、農薬選定、勉強会等を通じて均一な品質が確保できるようになり、販売にプラスになっている。安全・安心な農産物づくりに継続して取り組むことが大切である。

・事業実施後の新規就農の動向としては、子供がUターンして就農するケースや孫が後継者となるケースなど、新しい動きが出てきている。

・今春から息子がUターンして就農している。就農の動機は把握していないが、事業実施前であれば、営農が大変で薦めなかった。

・事業の実施によって時間にゆとりができたため、地域の女性農業者グループに参加して楽しく活動している。町内の別の女性グループと連携した活動も行っていく予定である。

・事業実施中、地域住民も参加して行われた地域の活性化を目指すワークショップの取り組みが、現在では、子供たちの営農体験学習や女性農業者グループの活動等に活かされている。

以上

令和元年度 事後評価「富士見地区」国営事業評価技術検討会
現地調査概要

日 時：令和元年５月 14 日（火） 13：30～15：00
出席者：
（技術検討会）　　長澤委員長、岡村委員、紺野委員、中原委員、波多野委員、森委員
（地元関係団体等）農業者、天塩町、天塩町農業協同組合
（事務局）　　北海道開発局
概 要：
【現 地】排水路、地区内整備ほ場

【意見交換会】
委員から、事業に対する効果、要望、期待等に関する質問があり、参加団体から以下の回答や意見、状況説明等や委員から評価に関する意見があった。

・事業実施前は、地盤が過湿なため、雨上がり後のほ場に入れなかった。事業実施後は、暗渠排水の整備によって雨上がり後すぐにほ場で作業が可能となり、牧草の適期収穫ができるようになった。

・事業実施前は、ほ場内のぬかるみにはまり、作業機械が動けなくなることがあったが、事業実施後は、ほ場条件がよくなり、大型機械での作業や大型トラックの出入りが可能となった。

・事業実施後は、ほ場条件がよくなり、近傍の大規模法人が農地を借りるようになっている。

・事業の実施によってほ場条件がよくなったため、耕作放棄地は発生していない。

・環境に配慮するため、連柴柵工で整備した排水路の土留めのヤナギが、現在は活着・繁茂しており、維持管理に苦慮している。

・事業の実施によって暗渠排水の整備を行い、作業の効率が上がった。しかし、既に整備から十数年経過して地盤が下がって凹凸が生じているところもあり、作業の支障となっている。

・本地区のコントラクター組織は、戸当たり経営規模の拡大にともない、今後も活用が増えると考えられる。コントラクター組織の作業員確保が今後の課題である。

・シジミの赤さび付着は、川以外に沼でも発生している。原因は未だ掴めていないが、様々な関係機関が集まって協議している。

・地域では、農家戸数の減少が課題となっており、農業生産基盤の整備が大事である。本事業を１つの契機として、北海道からの派遣職員の協力も得ながら、関係機関が連携して地域農業の将来目指すべき方向を示す「天塩町農業振興ビジョン」を策定した。こうした対策は、育成牛預託施設や大規模法人の設立等に結びついている。

・余所で働いた後Ｕターンして就農した息子が、搾乳ロボット導入など、親の代になかった先進的な営農を行っている。前向きな気持ちを持って経営を継ぐ気になったのは、事業がきっかけとなっていると思う。

・事業実施後は、都会で働いていた人が帰ってきてもいつでも酪農ができる状態になっている。新規就農者も入ってきている。

以上